

新人看護職員研修に関する検討会 助産師ワーキンググループ検討結果

1 検討の経緯

- 助産師としての基本的な実践能力の獲得を目的とした研修については、平成 21 年 12 月 25 日にとりまとめられた「新人看護職員研修に関する検討会中間まとめ」において、別途ガイドラインを策定することとされたことから、平成 22 年 2 月より本ワーキンググループにおいて検討を行ったところである。
- 本ワーキンググループでは、新人助産師の研修が、多くの場合、新人看護職員研修と同様の施設において行われていること等から、研修の理念、基本方針、研修体制、指導者の育成等については、新人看護職員研修と同様のものとする事とし、新人助産師の助産技術についての到達目標、助産技術を支える要素及び技術指導の例を作成した。

2 助産技術の到達目標について（別添 1）

- 助産師免許取得後に初めて助産師として就労する新人助産師が、① 1 年以内に経験し修得を目指す助産技術の到達目標及び、②助産技術を支える要素について検討した。
- 新人助産師の助産技術の到達目標の作成に当たっては、基礎教育との連動が重要であると考え、「看護教育の内容と方法に関する検討会」において検討されていた「助産師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度（案）」との整合性を図りながら作成した。具体的には、正常妊産褥婦及び新生児の対応については、基本的には、レベルⅠ「できる」を目標とすることとした。
- 一方で、異常を伴う対象への対応や、母子の 1 か月健康診査と保健指導のような母子の健康診査に関する知識技術とともに、地域における母子の生活を適切にアセスメントし個別のニーズにあった指導等、知識・技術の応用が求められるものについては、レベルⅡ「指導の下でできる」とした。

3 技術指導の例について（別添2）

- 技術指導の例の作成に当たっては、新人助産師は分娩介助や産後の母子のケア等について基礎教育の臨地実習等を通して経験していることを考慮し、新人助産師が臨床実践において遭遇した場合に、緊急的な対応が求められる可能性の高い新生児の心肺蘇生について作成した。

- 新生児の心肺蘇生については、近年のハイリスク分娩の増加等を背景にその必要性や重要性が国際的にも認められ、分娩時のケアの一環として修得すべき手技と認識されるようになってきている。今回の技術指導例については、日本において標準化された方法として確立された新生児蘇生法（NCP）を参考に作成した。

4 その他

- 本ワーキンググループでの検討の結果、助産師の就労後1年以内に経験し修得を目指す助産技術の到達目標、助産技術を支える要素及び技術指導の例については、新人看護職員研修ガイドラインの該当箇所に追加するのが適当であるとの結論を得た。